地底魔城の夜

Wondering Destiny

涼崎あやめ

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=23136387

ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, ダイの大冒険, 闘志と天使の後夜祭

【BOOTH】ヒュンマフェスの期間中（2024年10月4日（金）22：00～10月6日（日）21：00）
中綴じ印刷用PDFを無配します
https://ayame-ryosaki.booth.pm/items/6159800

Wondering Destiny

　地底魔城に囚われて二日目。
　ダイやポップはどうしただろう。無事でいてくれると良いのだけれど。
　弟弟子たちをおびき寄せるための囮として生かされている、という事実が私の心に重くのしかかる。
　どうにかして、この地底魔城から脱出しなければ。

　それにしても、囚われの身にしては丁重に扱われている、と思うのは我ながら楽観的すぎるだろうか。
　今日も、がいこつけんしやミイラおとこが相変わらず牢の外を闊歩している。何度見ても、ゾッとしない光景だ。本当は私はもう死んでいて、実は死者の国へと足を踏み入れているのではないか、と錯覚してしまうほどに。

　一日に数回、私をここに連れてきたモルグと呼ばれる蝶ネクタイを着けたくさったしたいが様子を見に来る。
　私は人間だから、飲まず食わずではいられない。もちろん、トイレだって必要だ。モルグと呼ばれるくさったしたいは、そのことをきちんと理解しているらしかった。
　その点では、不死騎団長――ヒュンケルが人間であったことは、私にとっての幸運だったのだろう。さもなければ、私はこの牢の中で脱水か飢えに苦しむことになったに違いない。
　何せ、ここは食べ物も水も必要としない怪物（モンスター）たちの不夜城なのだから。

　後ろ手に縛られた状態ではあるものの、牢の外に出てトイレに行くことを許された私は、迷宮のような城の奥深くを歩いていた。もちろん、私に自由などない。常に、ヒュンケルかモルグの監視付きだ。

そういえば、どうしてこんなところに人間用のトイレがあるのだろうか。疑問が頭の片隅を過（よぎ）るけれど、かつて、この地底魔城にある闘技場では魔王に捕らえられた人間が怪物（モンスター）と戦わせられていたと聞いたことがある。だとしたら、人間のための設備があっても不思議ではないのかもしれない。
　今回、私が牢に戻るまでの見張り役となったヒュンケルは、私の後ろに立って無言で歩いていた。
　迷宮に案内人はいない。
　薄暗い地下迷宮では、廊下の壁に突き刺さった松明だけが頼りだ。ゆらりと揺れる松明の影に、私は、上に向かって伸びている階段を見つけた。

——あれは、確か闘技場へと続く階段だ。

　地底魔城に囚われてからまだたった一日しか経っていないというのに、無性に太陽の光が恋しくてたまらなかった。
　外が見たい。
　そんな誘惑に駆られ、ふらりと階段に吸い寄せられる私に後ろから厳しい声が飛んでくる。
「おい。そっちは……」
「知っているわ。闘技場に続くのよね？」
　振り返った私は、ごく当たり前の質問に、ごく当たり前に答えただけだった。少なくとも、私はそのつもりだった。
　だけど——その瞬間、ヒュンケルの顔が驚愕に彩られる。
「ッ！？」
　信じられないものを見る目でこちらを見るヒュンケルに気圧され、「何よ？」と問うや否や、腕を痛いくらいに強く掴まれ、引っ張られた。
「ちょっと……！　痛いわ、離して！」
　ヒュンケルは私の問いには答えず、ただ、ずんずんと大股で牢に向かって私を引きずってゆく。

「いったぁ……」

出し抜けに牢の真ん中に放り出された私は、思わず、ヒュンケルを睨んだ。だが、こちらを突き刺すようなヒュンケルの視線に圧倒された私は、文句を言うために開こうとした口を思わず噤む。
「お前……なぜ、この城の構造を知っている？」
ヒュンケルは、ピリッとした空気を纏（まと）わせて私に尋ねた。
「え？」
問われた意味がわからず、ポカンとする私をヒュンケルが忌々しそうに睨みつける。
「答えろ」
誤魔化したり、何かを隠そうとしていると思われたのだろうか。それとも、スパイか何かであるとでも疑われたのだろうか。

「なぜって……」
そんなこと、言われたって困る。
実際のところ、自分自身にだって、初めて来たはずの場所なのに、何故、あの階段が闘技場に繋がっていると知っていたのかなんてわからないのだから。
答えに詰まって視線を落とした私の目に映ったのは、ヒュンケルが提げていた剣だった。禍々しい形をした剣を見つめているうちに、私は、ふと、懐かしい声を思い出した。

――一生、剣に生きるって決めてたんだけどなぁ。

そう言って笑ったのは、今はもう、記憶の中でしか会えない父さんだった。
私がまだ子どもの頃に死んでしまった父さん。
覚えているのは、日に日に生命力を失ってゆく父さんの姿。
だけど、父さんは私の前では決して苦しそうな顔を見せなかった。
いつでも笑って、色々なお話をしてくれた。

あぁ、そうだ。思い出した。

あれは、寝たきりになってしまった父さんの傍でとりとめもない話を聞いていた時のこと。
　私は、この地底魔城の話を父さんから聞いていたのだ。

§　　　§　　　§

「子ども？」
「あぁ。そうだな……多分、お前より五つか六つくらい歳上だったと思う」
　その日、父さんが話してくれたのは、地底魔城にいたという人間の少年の話だった。
「ちていまじょうって、魔王とか怪物（モンスター）とかが住んでいるんでしょ？　どうして、そんなところに人間の子がいたの？」
「そうだよなぁ。実は、オレにもわからないんだ」
「えぇ？　父さんにもわかんないの？」
「あぁ。だけど、アバンならきっと知ってるさ」
「アバン……？　いつも父さんのお話の中に出てくる人よね！」
「そうだ。父さんの、自慢の親友だよ。大事な友だちだ」

　アバン先生の話をする時の父さんは、いつも嬉しそうで。
　本当に大好きな友だちなんだろうなって、話を聞いている私の方が何だか嬉しくなってしまうくらいに、顔をくしゃくしゃにして笑っていた。

「その子は今、アバンさまのところにいるの？」
「多分な」
　父さんは、珍しく言葉を選んでいるようだった。
「なぁ、マァム。もし、いつか、あの子に会ったら……」
　そこまで言うと、父さんは押し黙ってしまった。その理由が、今ならわかる。
　だけど、当時の私は幼すぎて、父さんが何を憂いているのかなんてわからなくて。

「あたし、きっとその子と友だちになるわ」
　口にしたのは、幼い子どもなりの精一杯の言葉だった。理由はわからなかったけれど、肩を落としている父親を前にした子どもの、精一杯の約束の言葉。
「そうか……そうだな」
　何も知らない私が発した言葉に、父さんは胸を突かれたように目を見開き、そして、嬉しそうに笑ってくれた。
「マァムが友だちになってくれたら、きっとアバンも安心する」

§　　§　　§

　だけど、その後、父さんが亡くなってから数年してネイル村を訪れたアバン先生は誰も連れてはおらず、たった一人だった。
　不思議に思った私はあの日、父さんの言っていた『あの子』はどうしたのか、と何の気なしに尋ねたのだ。
「アバンさま」
「どうしました？」
「あの……あの子はどうしたんですか？」
「あの子……？」
「えっとね、ちていまじょうに住んでた子」
「ッ！！」

　私の言葉に、アバン先生は大きく息を呑んだ。いつも穏やかな微笑みを浮かべていた先生の顔の色が白を通り越して真っ青になったことで、私は自分の失言を悟った。
「あぁ、違うんですよマァム。私は怒っているわけではありません。少し、驚いて……すみません、びっくりさせてしまいましたよね」
　あまりに驚いて固まってしまった私を見て、アバン先生はハッとしたようで、必死に作り笑顔を浮かべてその場を取り繕おうとした。

もちろん、驚いた。
　それは、穏やかなアバン先生が珍しく感情を露わにしたからではない。いつだって――親友である父さんの死を知ったときでさえも――透徹としていたその瞳が、激しい悲哀と悔恨に満ちていたからだった。

　アバン先生はしばらくの間、静かに何事かを考えた後、おもむろに私に尋ねた。
「マァムは、どうして、その子のことを……？」
「父さんが言ってたの」
「ロカが……」
　予想はしていたのだろう。先生は、遠い目をして父さんの名前を呼んだ。

「あたし、その子とお友だちになりたくて……」
「……そうだったんですね」
　アバン先生は少し屈んで私と目線を合わせてくれた。肩に、先生の温かい掌がポンと乗せられる。それは、大事なことを話す時の先生の癖だった。
　先生は、大人だけど私を子ども扱いして誤魔化したりすることは決してしなかった。
　私が先生の言葉を、たとえ理解できなくても理解しようとしていることを大切に思ってくれている先生のことが、私は大好きだった。

「……実は私、あの子を探している途中なんですよ」
「え？　どこかに行っちゃったの？」
「そうなんです……」
「どっかで迷子になっちゃった？　探すの、お手伝いしますか？　あたし、森で迷子になっちゃった子を見つけるの、得意なのよ！」
「おやおや。それは頼もしい。さすがは誰かさんの娘なだけありますね」
　ふふ、とアバン先生は小さく笑った。

「でもね、マァム。その優しい気持ちだけで十分です。……あの子は、あの子だけは、私が探さなくてはならないのです」
「そっか……だから、アバン先生は色んな所を旅しているんですね」
「えぇ。もちろん、それだけが理由ではありませんが」
　先生が何を追い求めていたのか、私には知る由はなかった。だけど、きっと先生にとってはそれはとても大事なものだったのだろう。

「そうだ。一つ、お願いしても良いですか？」
　神妙な顔をした私に、アバン先生は優しく微笑んだ。
「何ですか？」
「もし、あの子がこの村を訪ねてきた時には、あの子のお友だちになってあげてください」
「はい！　もちろんです！」
「ありがとうございます。あなたがお友だちになってくれるなら、安心ですね」
　そう言って笑った先生の顔がどこか翳りを帯びていたのは、声が震えていたのは、きっと……。

　先生とヒュンケルとの過去を知ってしまった今、私には、あの時、先生が苦悶の表情で紡いだ言葉の意味が痛い程よくわかった。

――だけど、その先生も、今はもういない。

§　§　§

「そうか……そうだったのね」
　私の声は、石の壁に跳ね返ってコトリと落ちた。
「あなたが『ちていまじょうに住んでた子』だったのね」
　長い沈黙の果てに発した私の言葉がよっぽど意外だったのだろ

う。ヒュンケルは、怪訝な表情のまま私をギリッと睨んだ。
「どういう意味だ？」
「……私は、ずっとあなたに会いたかったのかもしれない」
「会いたかった……だと？」
　ヒュンケルは驚きと戸惑いの表情を見せる。
「何を言っている？」

　だけど、この期に及んでも私はまだ迷っていた。
　この話を口にすることは、私の父が——直接的にではないにしろ——ヒュンケルの父親の仇であることを告白することと同じなのだから。

　この告白が、彼の心にどんな影響を及ぼすのか——。
　正直に言えば怖かった。
　痛みはとっくに癒えていたけれど、初めて大人の男の人に頬を打たれた恐怖は、まだ、私の中に残っている。
　だけど、だからこそ伝えなければフェアではないような気がした。自分の身可愛さで真実を黙っている人間の言葉など、彼に通じるはずもない。それに、きっと父さんだったら同じことを言うはずだ。
　大きく息を吸って、私は瞳に力を込めた。

——父さん。私に力を。

「私の父の名前は、ロカ。アバン先生と一緒に、魔王ハドラーを倒した仲間の戦士よ」
　ヒュンケルは大きく目を見開いた。
「あの時の……！」
　やはり、ヒュンケルは父さんのことを見知っていたようだ。
「父はもういないわ。私が幼い頃に亡くなったの」
　そう告げると、ヒュンケルは複雑そうな表情をした。
「だけど、私は子どもの頃、父によくこの地底魔城の話を聞いていたのよ。だから……」

「そういうことだったのか……」
　得心がいったようにヒュンケルは呟く。

　今思えば、私は何て無知だったのだろう。私の頭の中には、『ちていまじょうに住んでた子』が怪物（モンスター）に育てられていた子どもだったという可能性なんて、これっぽっちもなかったのだから。
　きっと私は、心のどこかで彼の言うとおり、彼を怪物（モンスター）に攫（さら）われてきた可哀想な子、だと思い込んでいたのだろう。
　何て愚かだったのか。
　私は、自らの浅慮を恥じた。

　だけど同時に、私は知っていた。
　アバン先生がどれほど彼の身を案じていたのか。
　確かに、アバン先生も、彼を怪物（モンスター）に攫（さら）われてきた可哀想な子だと思っていたのかもしれない。自分が、彼の父親の生命を奪ったことを知らなかったのかもしれない。
　それでも、アバン先生が彼に向けていた深い愛情に嘘はなかったはずだ。
　他ならぬヒュンケル自身に生命を奪われかけたのにもかかわらず、先生は彼をずっと探し続けていたのだから。
　あんなにも、苦しみを抱え続けていたのだから。

　今こそ、私は伝えなければならなかった。
「アバン先生は、あなたをずっと探していたのよ」
「ッ！！」
　ヒュンケルの瞳が揺れ動いた。彼の心の中で何かが動き始めるのを感じて、私は、なおも言い募る。
「先生は、あなたが生きていると信じていたんだわ。だから、ずっと……」
「黙れ！」
　放たれた裂帛（れっぱく）の気合が石壁をピシリと鳴らす。それ

でも私は彼から決して目を逸らすわけにはいかなかった。
　驚くべきことに、肩で息をするほどに激昂（げっこう）しながらも、彼は、今回は私に手を上げなかった。
　それどころか、自分を落ち着かせるように目を閉じ、やっとの思いで絞り出すような口調には、どこか弱々しさが滲んでいた。
「黙れ……そんな言葉、オレは信じない」
　彼の痛々しいまでの頑なさから、それでも私は、私だけは目を背けるわけにはいかない。

　石牢を支配した沈黙を破ったのは、ヒュンケルの静かな低い声だった。
「一つ聞きたい」
「何かしら」
「お前はなぜ、あの時の戦士の娘であることをオレに明かした？オレが逆上してお前を殺すとは考えなかったのか？」
「……そうね。正直に言うと、本当のことを話すのは少し怖かったわ」
　素直にそう言えば、ヒュンケルは気まずそうに私から目を逸らす。
　怒られる前の子どものような仕種に、私は吹き出しそうになった。私に手を上げたことは、やはり、彼の本意ではなかったのだろう。
「だけど、きっとあなたはそんなことはしないって、何故かしら……私にも理由はわからないけれど、そう思ったの」
　私の言葉に、ヒュンケルは何かを感じ取ったのだろうか。彼はゆっくりと目を閉じ、深呼吸をした。

「お前の言葉を、信じることはできない」

　それは拒絶の言葉だったのに、ひどく切なく、そして哀しく響いた。
　ついさっき投げつけられた言葉と同じようで、少し違う。
　私を見る彼の目は、迷子になった幼子が縋りついてくる時のもの

と同じだった。
　きっと、彼は信じたいのだ。
　そう直感した。
　もしかして、彼は、私の言葉を信じたくても、信じるに足るものを私が持っていないことに憤りを感じているのかもしれない。そう感じるほどに、彼は何かを噛み殺すような必死の表情をしていて。

　何も持っていない、無力な自分自身が悔しくてたまらなかった。私があなたを信じるに足ると思った、あなたがどうしても捨てられなかったものは、今、私の手の中にあるというのに。
　そのまま、ヒュンケルは無言で牢の外へと姿を消し、私もただ、無言でその背を見送ることしかできなくて。

　ヒュンケルが投げ捨てたアバンのしるしを取り出し、私は誓う。今は亡き父に、恩師に。そして、彼の『お友だち』になると約束した幼い日の自分に。

——彷徨（さまよ）う彼の心を、数奇の海に揺蕩（たゆた）う彼の運命を、いつか、私が解き放つから、と。

　雫の形をした石が、私を励ますように淡く光ったような気がした。